

和国

季は地はワキ
秋 京都 ノカシ 丹後の僧
シテ 和国 里人

「身を捨てゝ住む山にても。 く。 憂き時いづち行
かまし。

「是は丹後の国より出でたる僧にて候。 我いまだ都
を見ず候ふ程に。 此秋思ひ立ち都に登り候。

道行
「大江山。 幾野の道の遠けれど。 く。 乗らでや過
ぎし里の名の。 馬路河原路打ち過ぎて。 跡より恋
のおひの坂。 桂の川の渡し舟。 法の道をや尋ぬら
ん。 く。

詞
「急ぎ候ふ程に。 是は早都に着きて候。 我宿願の子
細候ふ間。 先づ北野の経蔵に参らばやと思ひ候。
所の人の渡り候ふか。

ヲカシ
「シカく。

ワキ
「是は此処始めて一見の者にて候。 何事にても珍し
き事候はゞ。 見せて給はり候へ。

ヲカシ
「シカく。

ワキ
「其和国とやらん参りて候はゞ見せ候へ。

シテ
「桜木を。時雨や黄葉に染めつらん。右近の馬場の
秋の色。

ワキ
「是は承り及びたる和国にてましますか。

シテ
「見申せば旅の御僧と見えつるが。我名を和国と宣
ふ事。返すべくも不審なり。よしくそれは兎も
角も。何の故にて有るやらん。

ワキ
「さてさて御身の住み給ひし。在所はいづく何故に。
和国と名を付け給ふぞや。

シテ
「是は一条桃園のあたりに住む者なるが。我歌の道
に心を寄せ。其道を極めし故にや。少し慢ずる心
ありて。かやうに現なくなりたるにより。京わら
んべの言ひ習はしたる異名にて候。

ワキ
「げにく是は理なり。されども天満御神の。誓は
まさに曇らねば。直なる心と成り給ふべし。我等
は田舎の者なれば。歌道の事は知らねども。都の
土産に語り給へ。

シテ
「いでいで語つて聞かせ申さん。

シテクリ
「抑大和歌と申すは六義あり。

地
「是れ六道の巷に詠じ。千早振る神代の歌は。文字
の数も定めなし。

サシ
「其後天照大神の御弟。素盞鳴の尊よりして。
三十一文字に定まる事。八雲たつ出雲八重垣の御
神詠より。此国のことわざとして。

シテ
「人間のみか鳥類も。

地
「高間の寺に來りつゝ。鳴く鶯の声聞けば。歌の姿
は備はれり。

クセ
「さればにや畜類も。歌を詠するためしあり。浜の
真砂を歩み行く。蛙の道の跡見れば。住吉の。海
士のみるめにあらねども。仮にも人に。又訪はれ
ぬると。水に住む蛙まで。和国の風俗。神の御代
より始まりり。

シテ
「さればにや大国に。

地

「詩を作る諸人は。三界を詠むるに。花鳥風月。

松風の私語。鼓は波の音。笛は龍の吟を以て。舞樂をも作れり。唯人は。乱舞歌道に交はりて。心を延ぶること。万年の齡ひなるべし。

ワキ
「如何に申し候。此人は面白う狂ふと仰せ候ふが。さもなくして歌道の事を諷ひかなで。狂氣の様はなく候。

ヲカシ
「さん候此人は忍妻の候ひしが。其許へ通へと申し

候へば。諷ひ狂ひ候。

ワキ
「さあらば急いで御狂はせ候へ。

ヲカシ
「心得申し候。如何に和國。かの御方より急いで御通ひあれと申し來り候。

シテ
「何彼方より通へとや。通へば人や知る。又通はねば中絶ゆる。琴の糸切らさじと。夜々物を思はする。

ヲカシ
「何とて左様に仰せ候ふぞ。一夜なりとも御通ひ候

へ。

「一夜二夜は馴れそめて。三夜にもなれば住吉の。

松は根毎にあらはるゝ。

く。

地
「顕はれて。く。出づるは君と我と君と。枕の上
に。かかる涙の雨の夜も。雪の暁別れの鐘の音。
彼是いづれも思ひ見れば。歌の種とや成りぬらん。
く。